

過去の教訓を忘れず(1995年3月号掲載・中谷 満)

私が所属する生田消防署の管轄区域内では日頃から違法駐車が多く、災害が発生した場合に使用できない道路があるため、私は日課として特定の区域を約1時間かけて確認することになっている。地震発生当日もいつもと同じように午前5時30分に服装を整えて、出発する準備を2階事務室でしていた。

そして、出掛けようとした午前5時46分、突然「ドカーン!」という爆発音がしたので、最初は隣の生田警察か、神戸税務署で爆弾テロでもあったのか、それともタンクローリーが消防署の1階車庫に突っ込んだのかと思った。すると、まったく動けないほどの横揺れが襲ってきたので、その時初めて地震だということが分かった。また、防火扉が閉まりかかったので、職員の退路を塞がれてはいけないと、必死で閉まるのを押さえたのと、事務室内は壁が崩れ、土煙が立ち込めていたのを覚えている。

取り敢えず職員に負傷者がいるのかを確認するため当務員全員を集めたところ、全員無事であることが確認できた。日頃から寝起きを共にしているから、顔を見れば欠けているのが誰かはすぐに分かる。庁舎内の様子から足元の安全を確保するため、特殊作業靴に履き替えるよう全員に指示した。

その時、1階受付からガス臭いという報告があった。降りてみると確かにガス臭い。車庫内に消防車両を置いていて、いざ出動というときにエンジンを掛けて爆発してはいけなし、車庫の外に出

しておけば、庁舎が崩壊しても活動できると判断。ポンプ車や救急車など比較的軽量の車両を押し出すよう指示した。幸いにも車庫の前は、共同溝が敷設されているから架空電線がない。

また、地震の規模からして直感で神戸の西半分は壊滅したのではないかと思った。すぐに応急救護所が必要になると思い、仮眠用の布団を車庫内に並べ、現場指揮本部を車庫前に開設するよう指示した。ガス臭いということがあったので、場所の選定には十分配慮した。後になって振り返ると、この指示が的確であったと思う。

現場指揮所では、1名が記録を取り、私は現場に行かず部隊の編成や事案の優先順位付けといった段取りに専念することにした。情報収集には救急車のラジオを活用した。

2～3カ所で4～50人の群衆が見えた。この集団が一時に押し寄せて来ると指揮所が混乱を起こして收拾がつかなくなるので、「近くの避難先は、北野小学校、生田神社、神戸女子短大だ」と言って一応の收拾をつけたが、後になって北野小学校や神戸女子短大は閉鎖されていたり、生田神社は本殿が倒壊していたりして実際には避難場所にならなかったことで、お叱りを受けることになった。

応急救護所では70人ほどの応急手当をしたように思う。中でも病院での手当が必要な傷病者については、すべて神戸日赤病院に搬送した。神戸日赤病院に搬送した理由としては、大規模災害が発生した時の立ち上がりが早いこと、複数科目を診断できることがあったからだ。2～30分もすると、灘区や中央区東部の葺合地域から傷病者が流れ込んできた。

現場指揮所を車庫前に置いた理由としては、庁舎内に置くと電話による通報がひっきりなしにかかり、一つの現場に幾つもの通報を受け付けることになり、出動部隊が何隊あっても足らなくなる。これは、平成3年9月27日に台風19号で被害が発生した際、一時間に15～6件の通報があったが、3～4件の通報で現場は一つであったことがあり、本当に必要な現場なら駆け込みで通報してくれると考えたからだ。

現場指揮所を1階においたお陰でどこが燃えているとか、どこで助けを求めているなどの情報やどの道が通れないといった口コミ情報が数多く入手できた。また、対面して指示が出せたので良かったように思う。そのためか、警察や自衛隊もこちらに情報収集に来て現場対応をしていたし、他都市からの応援部隊も道路状況からここを本部と思い、集結してきた。

また、現場でショベルカーなどの重機が必要な時に、偶然にも「私の会社で重機を待機させているから必要なら言ってください」と、有り難い申し出をうけることができたように思う。

優先順位としては、第1を火災、第2に救助、第3を救急とした。手付かずの現場が出ないようにすることを考え、最初は救助隊を2班に分け現場対応に当たらせたが、現場の数が増えるに従って更に班分けをして、最大で5コ班が編成できた。1隊当たりの構成人員も最少人数として、常にポンプ隊などの1隊を留め置くように心掛けた。

「何をやっているんだ」と文句を言いに来た人には、「現場で人手が足りないから手を貸してくれ」と否応なしにお願いした。渋々手伝いをしていた人が一つの現場で救助活動の手助けをすると、「次の現場はどこですか」と言われたのが印象に残っている。

最小人数で対応したので、出動隊にはできる限り現地にいる人たちに手伝いをお願いするよう指示を出していた。

また、繰り返しになるかも知れないが、一つの火災現場には一つの隊という原則で、必要があれば増強するようにした。抜けの現場がないようにと心掛けたことでは職員が対応すれば、避難勧告などの必要な指示ができると考えたからだ。

市内各地で災害が発生していたから、無線が輻輳し、当てにならなかったのが非効率だが、伝令方式を採用した。後になって聞いた話だが、自衛隊でも同様の対応をするという。

今にして思えば、もしも金曜日の夕暮れにでも地震が発生していたら、もっと大きな被害になっていたのではないだろうか。考えただけでもぞっとする。